

目 次

活動報告

- ◇ 沖縄地域文化のデジタルアーカイブ活動報告
— 2019 年の沖縄サテライト校の取り組みを中心に — 1

デジタル・アーキビスト資格取得講座

- 2019 年 2 月開催 準デジタル・アーキビスト資格取得講座 7
2019 年 5 月開催 デジタル・アーキビスト資格取得講座 22

シンポジウム

- 2019 年 7 月開催 デジタルアーカイブシンポジウム（沖縄） 75

沖縄サテライト校 デジタルレコード ～地域資料の記録～

- No. 1 糸芭蕉から糸ができるまで 102
No. 2 チナマチウグワン（縄張り） 104
No. 3 美濃まつりと美濃流し仁輪加 106
No. 4 キノボリトカゲ 108
No. 5 六月ウマチー（ルクグッチウマチー）（稲大祭） 109
No. 6 四カ字（しかあざ）の豊年祭（プール） 111
No. 7 サガリバナ 113
No. 8 久米至聖廟（久米孔子廟） 114
No. 9 首里城公園と周辺 116

沖縄地域文化のデジタルアーカイブ活動報告

ー 2019年の沖縄サテライト校の取り組みを中心に ー

大城 學^{*1} 加治工 尚子^{*2} 加藤 真由美^{*3} 眞喜志 悦子^{*4}
又吉 斎^{*5} 新垣 さき^{*6} 比嘉 勇太^{*7}

＜概要＞ デジタルアーカイブジャパンの構築を推進する我が国は、地方大学に「つなぎ役」として、コンテンツホルダーおよび人材育成機関としての役割を期待している。岐阜女子大学沖縄サテライト校では、国が目指す「分野・地域を超えた知的資産の集約・検索が可能な仕組み」を担うべく、地域文化資源のデジタルアーカイブ化をとおした素材データの蓄積、ならびに、デジタル・アーキビストの養成に取り組んでいる。今回は、2019年の沖縄サテライト校の活動から、観光・学習素材の充実と人材養成について報告する。

＜キーワード＞沖縄、地域文化、デジタルアーカイブ、デジタル・アーキビスト養成

はじめに

国はデジタルアーカイブジャパンの構築を推進し、分野・地域を超えた知的資産の集約・検索が可能な仕組みを目指しており、地方大学には「つなぎ役」として、コンテンツホルダーおよび人材育成機関としての役割が期待されている。そのような中、岐阜女子大学では、文部科学省私立大学研究ブランディング事業「地域資源デジタルアーカイブによる知の拠点形成のための基盤整備事業」を受け、その諸活動を展開するとともに、これまで継続してきたデジタルアーカイブ活動と利活用の課題解決に取り組んできた。

沖縄サテライト校（以下「沖縄校」）では、事業番号 No. 1－Ⅲ「デジタルアーカイブの利活用の課題～デジタルコンテンツの提示・提供、課題解決、知的創造へ～」というテーマを掲げ、2019年の諸活動を進めてきた。2009年の沖縄女子短期大学との姉妹校提携を機に、新たな拠点となった沖縄地域での記録活動を継続している。それらの活動を軸とし、地域文化資源デジタルアーカイブの構築とデジタル・アーキビスト養成活動について報告する。

1. 沖縄サテライト校の活動内容（2019年）

（1）主な活動内容について

沖縄校では、地域文化資源のデジタルアーカイブ化を目指し、主として素材データの蓄積とアーキビストの養成を行っている。ひとつは、毎年発行を続けている冊子「沖縄お

らい」に供する観光・学習用素材を中心とした関連データのアーカイブ活動があり、そして、沖縄女子短期大学さんの協力を得て、地域のアーカイブ活動を担う人材を育てるアーキビスト養成講座を毎年開催している。主要な活動はつぎの4つである。

- ① 地域文化資源のデジタルアーカイブ化
・地域素材の収集・記録・保存とメタデータの整備
- ② デジタルアーカイブ資料の利活用と研究活動
・デジタルアーカイブ資料を活用した教材開発、課題解決、比較研究
- ③ デジタルアーカイブ活動に携わる人材の育成
・沖縄女子短期大学との連携による「デジタル・アーキビスト資格取得講習会」の開催
- ④ デジタルアーカイブに関する研究報告会の開催
・自治体、研究機関、企業などの活動事例や課題の報告をとおした人と知識の交流

（2）本稿の報告範囲について

沖縄校での活動内容のうち、本稿では、①、③、④について紹介することとし、②アーカイブ資料を活用した研究詳細等については、別稿に譲る。（参照：大城學，加藤真由美，眞喜志悦子【第14回 デジタルアーカイブ研究会】）

以下、沖縄校の2019年の活動について、2章で人材育成活動について、3章で地域素材の収集活動から沖縄本島中部の記録3本と石垣島の記録を1本を時系列にそって紹介する。

^{*1} Manabu, Oshiro ^{*2} Naoko, Kajiku ^{*3} Mayumi, Kato ^{*4} Etsuko, Makishi：岐阜女子大学
^{*5} Itsuki, Matayoshi ^{*6} Saki, Arakaki ^{*7} Yuta, Higa：沖縄女子短期大学

2. デジタルアーカイブを担う人材養成

沖縄校では、沖縄女子短期大学さんとの共催でデジタル・アーキビスト資格取得講座と認定試験、準デジタル・アーキビスト資格取得を目指す授業と試験、アーカイブ活動の研究会を開催した。2019年は、2月に準D A、5月の連休にD A、7月に研究会を行った。

(1) 準デジタル・アーキビスト資格取得試験

2月、沖縄女子短期大学の主催で準D A資格取得講座が開催され、本学の教員も講師として参加した。短大の学生と一般受講者が準D A資格取得認定試験を受験した。

開催日：2019年2月23日

参加者：一般19名、学生11名、短大職員3名

受験者：33名（全員合格）

この講座の一般受講者から、5月の上位資格取得講座へのつながりもみられた、上級デジタル・アーキビストに関する問い合わせも多く寄せられた。

(2) デジタル・アーキビスト資格取得講座

5月の連休を利用して、D A資格取得の講座を開催した。

日 程：2019年5月2日～5日

受講者：一般18名、学生30名

受験者：16名（全員合格）

沖縄の地域文化の学びをテーマに、世界遺産に登録されている組踊の座学（講師：大城學）と国立劇場おきなわのバックヤードツアーを実施した。技術・権利処理の実践例として、ドローン安全協会の吉田淳氏によるドローン講習、沖縄アーカイブ研究所の真喜屋氏による沖縄地域映像デジタル配信とコミュニティでの利活用について紹介があった。

本講座に参加したメンバー間から勉強会を継続して行いたいとの要望が出た。それぞれの現場での課題や知識を持ち寄る形での、情報と技術の交換会が提案された。この取り組みから、参加者間での人的交流の輪が広がり、沖縄地域における具体的で実践的なアーキビストの活動について相互に認識する場となった。実際、7月に開催するシンポジウムのパネリスト・講師をお願いすることにつながっている。また、沖縄女子短期大学の教職員から、上級デジタル・アーキビスト資格取得を目指して本学大学院への入学者があった。今後、同地域の人材育成の核として期待される。



写真1 講習とバックヤードツアー（国立劇場おきなわ）



写真2 ドローン講習（ドローン安全協会 吉田淳氏）



写真3 映像アーカイブ（沖縄アーカイブ研究所 真喜屋氏）

(3) デジタルアーカイブシンポジウム（沖縄）

7月には、本学で続けているデジタルアーカイブ活動の利活用の状況と地域の文化財等の記録・保管・提示を行っている企業の活動について紹介するシンポジウムを開催した。

開催日：2019年7月14日（日）13時～18時

会 場：沖縄女子短期大学 1F 大教室

参加者：一般20名、学生30名

講 師：後藤忠彦（本学顧問）、文化財サービス他
テーマ：デジタルアーカイブの利活用と課題

今回のシンポジウムでは、株式会社文化財サービスさんに提案していただき、合同会社T.R.Fの武部さんから「文化財を対象とした3Dの利活用と課題」について実演を交えつつ紹介していただくことができた。行政側の抱える課題と企業側が提供できるノウハウなど、マッチングの場としてもこのようなシンポジウムを続けていただきたいとの声があった。また、高校生を対象として行うことで、進学や学部選択、職業の検討、地元に活躍の場があることの周知につながるとの意見も出た。



写真4 シンポジウム会場（沖縄女子短期大学 大教室）



写真5 文化財の仕事とデジタルアーカイブ
（文化財サービス：山本洋子、千田寛之、合同会社T.R.F 武部拓磨）

(4) 交流拠点としての役割

このように、参加者であった現場の学芸員や行政担当者らとの意見交流を積極的に進めることでアーカイブに対する知識分野や裾野が広がりが感じられた。沖縄地域におけるデジタルアーカイブに関する人・知識の交流拠点としての役割を担うべく、これからも活動を継続していきたい。

3. 地域素材の収集・記録・保存活動

沖縄県は、49の有人島と多数の無人島で構成され、東西約1,000km、南北約400kmという広大な県域を持つ。しかし、これまでの調査・記録活動は拠点のある沖縄本島の南部を中心とするものに偏りがみられた。これは、当初、修学旅行生向けの沖縄情報を発信するという目的から、県外の旅行生が多く訪れる沖縄本島南部の戦跡や世界遺産などを対象とした記録とコンテンツ化に取り組んできたことに起因する。近年では、修学旅行生の行動範囲も広がり、本島中北部や周辺離島まで出かけて行き、民泊や体験ツーリズムを取り入れるなど、行動様式にも多様化がみられる。これらの状況をふまえ、利用者からの要望に対応すべく、より広範囲を取材対象として計画を行った。以下、沖縄県内の行事は陰暦（旧暦）を基準に行われることが多いため、必要に応じて新旧両方を表示する。

(1) 芭蕉から糸ができるまで（うるま市）

日時：2019.1.19（土） 早朝～夕方

場所：うるま市勝連南風原

内容：糸芭蕉から糸を得る作業工程の記録

① 芋倒し・芋剥ぎ

糸芭蕉を切り倒して、皮を剥ぐ

- * 3年程育てた糸芭蕉を選ぶ
- * 鎌で根元を切って倒す
- * 葉の部分を切り落とし120cm程に揃える
- * 根を上にして立てて持ち皮を剥いでいく
- * 口割クチワキ（ナイフに紐がついた道具）を用いる
- * 繊維の質によって3種類に分けて置く
 - ・ウーハ（上皮）：外側で固い 黄土
 - ・ナハウー（中皮）：少し柔らかい ↓
 - ・ナハグー（内皮）：非常に柔らかい 白桃
- * 芋剥ぎ下皮を表裏の2枚に剥ぎ束ねる

② 芋炊き

剥いで束ねた皮を灰汁で煮る

- * 木灰を水に溶かして沈殿させておく
- * 鍋の水に灰汁を加えpH 11.6の液を用意
- * 湯が沸騰してから芭蕉の束を鍋に入れる
- * 30分ほど煮てから束の上下を入れ替える
- * 炊けているか繊維のほどけ具合を確認
- * 炊きあがったら少し蒸らす
- * 水洗いをして水を切る

③ 芋挽き

皮から不純物を取り除き繊維を取り出す

- * 竹バサミで挟み不純物をしごきとる
- * 2回ほどくり返すと糸らしくなる
- * この作業をひたすら続ける
- * 芋挽きされた繊維は干して乾燥させる

④ 芋績み

繊維を細く裂き、結びつなげて糸にする

- * 芋挽きした繊維は太いため細く裂く
- * 裂いた繊維を結びつなげていく
- * 時間と熟練のいる作業

今回の取材では、①～③までを収録した。④の芋績みは別日に行うということで残念ながら記録に残すことが出来なかったため、今後の課題としたい。

さて、記録作成に協力していただいた皆さんは織りを専門とする職人さんの集まりであった。「出来ることなら糸づくりからやってみたい」との思いが募り、糸芭蕉の栽培方法や作業工程を芭蕉布の里として知られる大宜味村喜如嘉に習いに行き、さらに、畑と工房があるうるま市の委託学級開設事業での地域活動等の体験をとおしてノウハウを得たとのことで、作業工程の記録物としては手探り状態な部分も多く見られたが、なによりも織り手である職人さんたちの思いや熱意に触れることが出来、得難い記録となった。

着物が織れるくらいの糸を得るには、およそ200本の芭蕉が必要なのだという。栽培管理からはじまり、今回記録した糸づくり、さらにこの後には、撚糸、染色、機織り、縫製などの工程を経ることになる。気の遠くなるような作業である。かつて御用布として琉球王府への年貢が課せられていた先島地域には、多くの労働歌や説話なども残っている。過酷さゆえである。また、今回はガスを利用して湯を沸かしていたが、本来は薪であって、そこから出る灰が芋炊きの灰汁になり、芋挽きでしごかれ排除される不純物の繊維は、紙などの原料として再利用されていたという。周囲にある自然を無駄なく活用し生活や産業が

うまく循環するようになっていた。

これまでの記録活動は、機織りの工程などを部分的に捉えて見栄えのいいところに着目しがちであった。もちろん、それらの素材を積み重ねていくことも大事である。それぞれの地域にある自然や暮らしなどの歴史や背景も織り込んだその地域ならではの視点を持ったアーカイブ活動を続けていきたい。



写真6 芋剥ぎ → 芋炊き → 芋挽き → 芭蕉糸

(2) 知花ノロ殿内と民俗行事（沖縄市）

① チナマチウグン（縄張り）

日時：2019. 1. 29（火）旧暦12. 24

場所：沖縄市知花

協力：知花ノロ殿内の島袋さん父子、区長
内容：一年の感謝と繁栄の祈願（御用納め）

9:40 …ノロ殿内に区長さんが訪れて拝む

9:50 …知花ノロ殿内→カンサヂヤー付近

9:55 …新しい縄と鎌を携帯して御嶽へ

10:10 …1カ所目 ムイグチウタキにて
昨年の縄を除いて新しい縄を張る
左回りに3本

張り終えたら拝みをして次へ
10:30 …2カ所目 モーヤマウタキにて
同様に3本の縄を張り替える
張り終えたら拝みをして次へ

10:45 …3カ所目 イーストヌモーにて
同様に3本の縄を張り替える
張り終えたら拝みをして終了

この撮影は、知花ノロ殿内の娘さんからの声掛けで実現した。整備されていない草原を切り開きながら御嶽をまわるため、従来は自治会の男性メンバーとノロ殿内の島袋さん（父）で執り行っているという。地域住民でも見たり参加したりする機会はないので、娘さんですら初めての経験ということであった。また、以前は4カ所巡拝したものが3カ所のみとなっていたり、かつては大岩の周囲をぐるっと取り囲むなどしていたが、現在は一部分のみに張ったりという具合にかなり簡略化されてきているという。沖縄戦当時の様子も含め、貴重な話を収録することが出来た。

一方、知花自治会の別の拝所では、女性役員によってウグンブトウチ（御願解き）が行われていたのので、そちらにも参加することができた。拝所内の香炉と火の神にお供え物

をして、一年の報告と感謝の祈りを捧げていた。この方は正式な神役が不在のため代理で行っているということであったが、次のウマチーでも同じような役割を担われていた。

② 六月ウマチー（稲大祭） 旧暦 6月13日～15日
日時：2019. 7. 16(火)・17(水) 旧6. 14, 旧6. 15
場所：沖縄市知花

内容：一連の稲作儀礼の一つ（豊作の感謝）

〈祭2日目 旧暦6. 14〉「カーブヤーづくり」

知花ノロ殿内の周辺にある植物を採ってきて、祭祀のときにノロが被るカーブヤー（草の冠）を準備する。カーブヤーの材料はカニクサ（三味線蔓^{しゃみせんづる}）で、蔓を左回りに編んで冠を形作る。ノロがいた頃は、人数分の冠を用意したが、現在はノロが不在のため作るのは1つのみであった。また、この冠をつくる場所について、かつてはノロ殿内の後方にある御嶽で作業を行っていて、神役以外が行うものではなかったという。また、知花ノロの統括範囲は、知花・松本・登川・池原の4つの集落で構成され、それぞれの元家では、旧暦の6月13日に神酒の準備を行い、翌14日にはカーブヤーの準備のため知花ノロ殿内へ集合していたそうである。

冠の他に、祭祀で用いる草木の葉を準備する。ススキやアザカ（琉球青木）などの植物を採ってきて束ねる。本来は稲穂を束ねていたが、近年、知花の付近では稲作が行われておらず稲束が入手できない。当主が元気な時は金武町（沖縄本島内の米どころ）まで稲穂を調達に出掛けていたそうだが、それすらも行われなくなり、今は代用として稲穂に見立てた植物を束ねているという。



写真7 カーブヤーづくり（旧6. 14 知花ノロ殿内縁側）

〈祭3日目 旧暦6. 15〉「儀式」

ウマチーの3日目、午前10時頃に知花ノロ殿内へ各区の区長や神人が集合。1日目に各地でつくって持ち寄った神酒^{ウンスク}を捧げて祈りが始まった。その後、参加者みんなで神酒を少しだけ頂く。つぎに場所を移し、カンサヂヤーでの儀式が行われた。神人に対して区長らが酒を捧げ、チゼン（鼓）持ちが鼓を叩かせて縁起をつけてもらい、ウムイの斉唱が始まった。参加者は歌詞を見ながら、吹き込まれたウムイの音をラジカセで流しながらというス

タイルであった。ここでの儀式を終え、つぎの場となるイヌトウヌモ（上之殿毛）への移動するのだが、倒木の危険があるとのことで、急遽、下の広場で執り行われることとなった。神役の先導で祈りが捧げられ、この場での一連の儀式を終えたあと、他の地区の区長さんたちはそれぞれの地域での拌みのために解散となった。

補足：知花ノロ殿内では、出発前にかつての神衣裳である白い着物や勾玉などを見せていただいた。しかし、現在は神役不在のため、参加者はみな普段着と簡素化されていた。



写真8 神酒，ウムの斉唱（旧6.15 カンサヂヤー）

(3) 四カ字の豊年祭（石垣市）

毎年旧暦の6月に行われる豊年祭。五穀豊穡への感謝と来夏世の実りを祈願する行事である。2019年は石垣島の四カ字（新川，石垣，大川，登野城）豊年祭について、宇新川の女性を中心に記録する機会を得た。女性だけの神事である「アヒャー綱」の大役を担うことになった東嵩西さんからお話を伺いながら、祭の前日準備，リハーサル，本番の流れを記録することが出来た。

① 前日の準備（真乙姥嶽）

7月24日の夕方、豊年祭ので4字が集まる場となる真乙姥嶽を訪れると、綱引きで使用する綱の準備中であつた。御嶽内の樹木に綱をかけ、搬入された稲藁を編みこむ作業を男性のみで行っていた。出来上がった綱は、道路に沿って配置され、その日の作業は終了した。その後、女性たちも集まりだし、儀式や余興のリハーサルが夜遅くまで続いた。



写真9 綱の準備とリハーサル（7.24 真乙姥嶽）

② オンブール（長崎嶽：宇新川）

7月25日は、各字の御嶽でプバナアギ（初穂揚げ）が行われる。宇新川にある長崎嶽ではお昼過ぎから地域の方々が一品携帯で御嶽内の広場に集まっていた。やがて、拌殿内ではミシャグパーシ（大神酒奉献）の儀式が執り

行われ、その後、広場では優良農家の表彰式と婦人会や青年会、子どもたちによる祝賀会と余興が賑やかに繰り広げられた。

夕方、メイン会場となる真乙姥嶽では踊りの練習がはじまっていた。その後、ツカサや先輩神役を交えて翌日行われるアヒャー綱の段取り確認が行われた。



写真10 プバナアギ（長崎嶽）とアヒャー綱練習（真乙姥嶽）

③ ムラプール（長崎嶽・真乙姥嶽）

7月26日は、ムラプールである。宇新川にある真乙姥嶽に四カ字のほか、双葉公民館やJ Aおきなわ、八重山農林高校などが参加して盛大に行われる。

宇新川では、昼過ぎに長崎嶽に集合し、神役を先頭に長崎嶽内を一巡する。そこで旗頭の奉納と巻踊りの奉納などを行い、やがて全字が集う真乙姥嶽に向けて行列が出発する。このようにして各字などの一行が真乙姥嶽前の道路脇に旗頭がずらりと勢揃いする。



写真11 巻踊り奉納（長崎嶽）、旗頭を先頭に真乙姥嶽へ

真乙姥嶽では、司が各字の一行を迎え入れる。踊りの先導は標旗を持った男児、その後ろに五穀の入った簞を捧げた男児、つぎに水主と呼ばれる婦人たちが白朝衣に白鉢巻き姿で団扇を持ってつづき、その後ろに区長をはじめとする古老たちが合掌しつつ「ヤーラーヨー」を唄いながら連なる。さらに、その後ろには麾を手を持った女性の一团、箆を持った女性の一团、杵をもった男性の一团、鎌を持った男性の一团、鉦鼓、太鼓隊のほか道化役の若者が続く。



写真12 真乙姥嶽拌殿の司と巻踊り奉納（真乙姥嶽）

各字からの奉納が終わると、爆竹の音を合図に東西から旗頭が真乙姥嶽の鳥居前に集まってくる。その後、戸板に乗って東からは農の神、西からは司が寄せてきて、鳥居の前

で五穀種子授けの儀が行われ五穀豊穰を約束する。爆竹の合図で東西に離れていき、旗頭とガーリーの後、女性だけのアヒャー綱となる。ブルピトゥ（棒貫人）が神司からブル棒を受け取り、雌雄の大綱をつなぎ合わせる。



写真13 五穀種子授けの儀とブルピトゥ（真乙姥嶽前）

アヒャー綱の儀式が終わると、大綱は参加した人々の手で綱引き会場へと移動される。綱引きの本番は御嶽の前ではなく西の会場で行われる。綱引きが開始されるのは日が暮れてからとなるため、少し間があくことになる。夕闇の中、東西から松明を先導にナギナタとカマを持った武者が登場した。中央付近で勇壮なツナノミンを披露して離れていく。最高潮に盛り上がった後、観光客も参加して大綱が引かれた。今年は西の勝利であった。綱引きが終わると、旗頭が各字へと帰っていく。暗い夜空に旗頭の明かりが映えて最後まで見ごたえがあった。



写真14 カマを持った武者(西)と各字へ帰る旗頭

今回の豊年祭の取材では、祭の翌日に、ブルピトゥ役を担った東嵩西さんにお話を伺う予定をしていたが、日を改めることになった。

四力字の豊年祭は、幼児からお年寄りまで役割があり、その活躍ぶりが印象に残った。

(4) 首里城跡と周辺の記録（那覇市首里）

2019年10月31日未明の首里城火災により、正殿を含む7棟が消失した。沖縄県の歴史と文化のシンボルとして約30年をかけた復元作業を終えたばかりであった。建物内には多くの貴重な文化財も展示されており、県民の喪失感は一計り知れない。その後、国内外からの応援メッセージや募金活動などを受け、首里城の再建への前向きな取り組みが各地でみられるようになった。専門家や有識者だけでなく、県内各地で様々な団体が再建に向けて何ができるかを話し合っている。5月のデジタル・アーキビスト講習会でお世話になった沖縄デジタルアーカイブ協議会の真喜屋氏らを中心

に、首里城の復元・再建に向けてデジタルアーカイブに何ができるかといった内容の意見交換会も行われた。これまでの復元に関する資料の収集、復元に携わった人々へのインタビュー、オーバーツーリズムの問題など、首里城と周辺地域が抱える課題の解決にデジタルアーカイブが活用できるのではないかとということであった。個人や各機関が収集した資料などの情報を共有化・体系化することで、相互に補足し合える状況を作り出すことが求められている。

沖縄校では、折に触れ首里城を訪れ撮影実習等の記録を重ねてきた。その多くは静止画によるものだが、一部には、建物内部を案内していただいた際の映像なども残っており、今となっては貴重な記録である。現在、正殿付近にはまだ報道陣しか入ることが出来ないが、少しずつ公開エリアが拡大している。今後の展開を含む記録活動を継続していきたい。



写真15 首里城火災跡 北殿 奉神門 (2019. 12. 21)

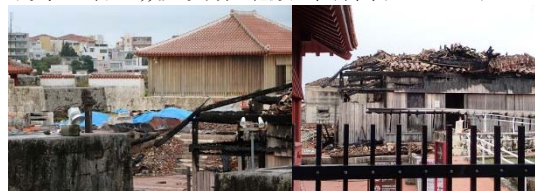


写真16 首里城火災跡 正殿遠景 南殿 (2019. 12. 21)

(5) 成果物の保管状況

これまでの記録物は、年度ごとのフォルダ内に日付・イベントごとのフォルダを作成して蓄積してきた。静止画データはサムネイル一覧を作成し、紙に出力してファイルにつづるなど、アナログとデジタルの両方で保存・管理している。しかし、この方法では年度を隔てた検索に課題があるため、岐阜女子大学が検討しているメタデータを用いたデータベースの作成に向けて、データの登録作業を継続中である。コンテンツホルダーとしての役割も大切だが、併せて、地道な記録を丁寧に積み重ねていきたい。

以上

準デジタル・アーキビスト資格取得講座

開催日	2019年2月23日(土) 9:00~17:00
会場	沖縄女子短期大学 1階大教室 〒901-1304 沖縄県島尻郡与那原町東浜1番地
主催	沖縄女子短期大学
共催	岐阜女子大学
後援	特定非営利活動法人日本デジタル・アーキビスト資格認定機構
講師	新垣さき、比嘉勇太、又吉斎(沖縄女子短期大学)、加治工尚子、加藤真由美、眞喜志悦子(岐阜女子大学)(五十音順)
参加者	一般19名、学生11名、短大職員3名
受験者	16名(全員合格)

◇ 講座の様子(一部)



会場の様子



シソーラスの演習



シソーラスの演習



シソーラスの演習



撮影実習：多方向撮影



撮影実習：接写撮影



撮影実習：360度撮影



撮影実習：ドローン撮影



撮影実習：ドローン撮影

平成 30 年度 第 2 回

図書館・博物館・史料館、情報・メディア等関係企業、教員・公務員のための

準デジタル・アーキビスト

文部科学省 私立大学研究ブランディング事業
「地域資源デジタルアーカイブによる知の拠点形成の
ための基盤整備事業」(岐阜女子大学)

資格取得講座



平成 31 年 2 月 23 日 (土)

9:00~17:00 (予定) (一日取得特別講座)

※ 1年以上の社会経験のある方は、1日で取得できます

● 内容

講 義

1. デジタル・アーキビスト概論 (デジタル・アーキビストは何を学ぶか、デジタルアーカイブの構成)
2. 文化の理解と資料の収集 (文化と文化財、資料収集のための準備、撮影と収集記録)
3. 資料の選定評価、著作権、個人情報とプライバシー
4. 資料の短期・長期保存と利用 (メタデータとシソーラス、一時保管、短期・長期保管)
5. デジタルアーカイブの利用 (プレゼンの方法、利用メディアの多様化の支援、デジタルアーカイブの流通・デジタルアーカイブに必要な記録・撮影の基礎実習 全方位撮影 (パノラマ撮影) 等の実習を行います。準デジタル・アーキビスト資格認定試験 (60 分)

実 習

認定試験

● お申し込み

受講対象者

高等学校「教科情報」程度の基礎的な知識と技術を持っている方
(情報関連・メディア関係企業、図書館、博物館史料館
文書館、教員、公務員、企業など 資格取得を希望する方)

定 員

40 名 (定員になり次第締切らせていただきます。)
参加者が 7 名以下の場合には中止させていただくことがあります。

締 切

平成 31 年 2 月 8 日 (金)

費 用

受講料 15,000 円 認定試験料 5,000 円
テキスト代 800 円

テキスト

デジタル・アーキビスト入門
(当 NPO 刊) ISBN978-4-9909590-0-5

申込方法

右記の QR コードより必要事項を明記の上
お申込みください。
後日振込先等をメールにてご案内します。

支払方法

受講料 15,000 円、認定試験料 5,000 円、テキスト代金 800 円をまとめて 2 月 15 日 (金) までに指定の口座にお振込み下さい。
振込先の詳細については、ウェブ申込後にメールにてご案内いたします。

会 場

沖縄女子短期大学

〒901-1304

沖縄県島尻郡与那原町東浜 1 番地



お申し込み・お問合せ先

学校法人嘉数女子学園 沖縄女子短期大学

〒901-1304 沖縄県島尻郡与那原町東浜 1 番地

TEL (098)882-9001

FAX (098)882-8901

URL [www.owjc.ac.jp/sangaku/
openlecture/archivist](http://www.owjc.ac.jp/sangaku/openlecture/archivist)

E-mail sangaku@owjc.ac.jp



お申し込みはコチラ